皇太子（アキヒト）沖縄上陸決死阻止

七・一七、姫百合・白銀決死隊員糾弾状

沖縄解放同盟（準）本部

海洋博粉砕沖縄―「本土」共闘

仮連絡先
反権力反弾圧沖縄人民救援会（〇九八―五四―二〇八四）

領価二〇〇¥（含カンパ）

皇太子アキヒトの二度・三度の沖縄上陸策動（一一・三日本ナショナルデー、一・一八閉幕式）を反「日」暴動でむかえ撃て

全ての沖縄人は団結し、沖縄解放同盟（準）に結集せよ！「皇太子沖縄上陸阻止、戦犯天皇糾弾斗争を支持する会」（仮称）に結集せよ！　沖縄女性は、沖縄婦人連絡会議、沖縄女性解放会議へ結集せよ！

全ての沖縄ー「本土」（日本）の沖縄人のみなさん！大和人の諸君！

わが沖解同（準）の知念、金城同志は、戦斗的「本土」（日本）青年と共同して七月一七日、沖縄上陸を敢行した皇太子アキヒト・ミチコに対して、白銀病院三階ベランダから、姫百合の塔、壕内から、実力糾弾斗争を貫徹した。

われわれは、六月一八日の「皇太子沖縄上陸決死阻止」「海洋博粉砕」「大和人は沖縄から出ていけ」と大書された、死せる日本軍に占拠された摩文仁ケ丘糾弾斗争、六月二三日の「日の丸」慰霊祭粉砕斗争、六月二五日嘉手納第二ゲートにおける船本洲治君（大和人）の焼身決起と打続く六月斗争のうねりを、ただ一点皇太子アキヒトの実力糾弾の戦術的貫徹の成否にかけて七月一六～二〇日に至る五日間の激斗を公然ー非公然の統一的展開の下に、糸満、那覇、名護、本部（もとぶ）と沖縄「本」島を縦横にかけめぐり斗ってきた。

ヤマト機動隊の総力をあげた「準戒厳令状下」ともいえた警察支配の弾圧は、沖解同（準）に決定的ともいえる試練を与えた。われわれは、七・一七の姫百合・白銀のゲリラ的・パルチザン的斗争の貫徹と公然実力斗争の結合を、一点も余すところもなく総括・教訓化し組織活動の非公然体制を基礎にした全面的転換をなしとげねばならない。それなくして、反天皇を中核とする沖縄人意識の全人民的、全階層的な理論的、思想的成長と発展、そこを立脚点にした日米軍事基地に対する斗かいの萌芽を、基地撤去の暴力的展開を中軸にする、沖縄人民を主体とし、沖縄ー「本土」を貫ぬく、世界革命のポイントとしての沖縄解放斗争の大道にひきあげ、突き進むことはできない。沖解同（準）の政治的影響力の驚くべき拡大と波及を運動的前進に、非公然化を前提とした組織化と組織力量の前進に集約することを抜きに一切の問題はたてられない。

十・三「韓国」ナショナルデー朴来沖策動阻止斗争、「韓国人」慰霊塔建立阻止斗争、十一・三日本ナショナルデー皇太子第二次沖縄上陸阻止斗争、一・一八閉幕式皇太子第三次沖縄上陸阻止斗争とめじろ押しにならぶ斗かいを、その一つ一つを決戦として斗かおうではないか。

われわれの方針は鮮明である。秋・冬の斗かいを海洋博決戦の正念場として斗かえ！反「日」暴動の大爆発で粉砕せよ！

皇太子アキヒト・ミチコの沖縄上陸は、ヤマト族の首長の嫡子を先兵とするヤマト族本隊の沖縄上陸、占拠のさきがけであり、海洋博観光（「買春」観光）客の仮面を被ったヤマト人の沖縄占拠こそ、返還攻撃の本質であり、日本と日本人による沖縄に対する軍事的植民地支配の本質を示すものだ。

われわれは、沖縄人のあらゆる形態と手段、方法をもってする日本人個人、ヤマト侵略企業、官庁、軍事施設に対する斗かいを支持する。日帝の沖縄支配の先兵、機関に攻撃を集中せよ！われわれは、七月を通して確立されたヤマト警視庁ー沖縄「県」警の組織絶滅型攻撃をはねかえして、その先頭にたって反「日」暴動の血路をきりひらくであろう。

全ての沖縄人は団結し、単一の沖解同、沖婦連、沖女解に結集せよ！社青同解放派に手引きされた本村沖解同の敵対と逃亡を許さず沖縄を本部とする沖縄ー関東ー関西ー九州を貫ぬく単一の沖解同建設に勝利せよ！

一九七五年八月一日

沖縄解放同盟（準）本部

カンパ要請

天皇制打倒に奮斗する沖解同へ圧倒的資金カンパを！　秋冬の反「日」暴動斗争を準備する沖解同へ軍資金を！

七月十七日ひめゆりの塔における皇太子（火炎ビン）糾弾闘争勝利！

全ての沖縄を愛する沖縄人は、沖縄解放同盟に結集し、日・米軍事基地徹去、天皇制打倒、沖縄解放へ決起せよ！

声　明　文

七月十七日我々沖縄解放同盟（準）は、ひめゆりの塔において天皇（皇族）に対する積年の恐りと糾弾を、皇太子アキヒト・美智子に打ちおろした事をここに表明する。

再三再四にわたる我々の警告にもかかわらず、皇太子アキヒトは四千名の機動隊、二百台近くの装甲車、無数の私服警官、刑事、数機のヘリコプターを伴ない、それに固く守られ、沖縄を厳戒体制下におく事で沖縄上陸を強行した。そして、天皇の命とひきかえに二十万もの沖縄人の命を奪った沖縄戦の激戦地跡、南部戦跡へ足を踏み入れた事は、まさに天皇（制）に対する日本軍（日本人）に対する底深い沖縄人の恨みと恐りの三十年間に、はっきりと対決するものとして登場したのである。一六〇九年のサツマ琉球侵略以来三百数十年に及ぶ日本の沖縄差別支配は、常に天皇（制）を頂点に沖縄人を圧制してきた。特に沖縄人ー日本人の差別、追害の関係を極限状況で最も激化させた「沖縄戦」においては、日本軍は天皇の名のもとに沖縄人虐殺をほしいままにくり広げていった。

我々は、現在なお日・米軍事基地に支配されている沖縄に生きており、「沖縄戦」は過去の歴史ではなく今なお、沖縄人ー日本人、沖縄ー日本社会に、差別的侵略的本質を変えることなく脈々とうち続いており、この事実は何人も否定することはできない。我々はこの「沖縄戦」における壕内の苦斗の体験をわずかでも共有せんと、ひめゆりの壕において壕内生活を十数日追体験した。そして十七日の皇太子アキヒトの南部戦跡侵入が明確に「沖縄戦」の天皇責任を一切陰ペイし、沖縄人虐殺を正当化し、それを通じて新たな侵略基地の島へ沖縄と沖縄人をかり出さんとする侵略の象徴としてあり、それ故、皇太子アキヒトらのひめゆりの塔への献花は、沖縄人死者を土足で踏みにじり、ボウトクする行為以外何ものでもない。

我々は、まさにこの時、苦痛の壕内体験を自らのものとし、沖縄人の三百数十年間に及ぶ差別、収奪、迫害の差別支配への反撃、そして「沖縄戦」の天皇と日本人に対する一切の怒りと恨みを火炎ビンにこめ、皇太子アキヒト・美智子にたたきつけたのである。火炎ビンのまっ赤な炸烈は、天皇を頂点とした日本の沖縄差別支配に対する歴史的、必然的、正当な沖縄人の反撃・糾弾の斗いである。

我々は七月十七日の斗いを以上の正当性、必然性の故に断呼貫徹した。
七月十七日ひめゆりの塔における皇太子アキヒト決死糾弾斗争は、沖縄人の沖縄解放をかけた闘いであり、今後も我々沖縄解放同盟（準）は、更なる手段をもって沖縄差別支配の元凶とその尖兵と闘い続けることを追記しておく。

一九七五年七月二十日

関東沖縄解放同盟（準）
横浜市つるみ郵便局　私書箱61号

皇太子アキヒトの沖縄上陸を決死阻止する

沖縄同（準）本部姫百合決死隊員　知念　功

ついに我々の怨念を満身の怒りをもって爆発させる日がやってきた。恨みつらみの一切を戦犯天皇一族に叩きつける事ができるのだ。

沖縄ー「本土」の同朋の諸君。今日という日を我々は何と待ちこがれたことか。みてもみよ、皇太子アキヒトの恐怖にみちた顔を。右翼、天皇主義者のあわてふためく姿を。「皇居」の片すみで青ざめている戦犯天皇ヒロヒトを。いかなる弾圧と警備体制があろうとも、沖縄人民の怒りは天皇制・天皇制イデオロギー攻撃に屈服する「醜い大和人」のノドを突き刺し、日帝ー三木の背骨もろとも戦犯天皇一族の鼻をへし折る事は可能である事がはっきりした。

沖縄人はサツマ侵略以来すべてを奪われてきた。明治政府の同化ー皇民化攻撃においては虫ケラ同然の屈辱的生活を強いられ、第二次侵略戦争においてはアジア人民虐殺の尖兵としてしたてられてきた。敵から守ってやるといったはずの友軍たる日本軍は、沖縄人を「天皇のために死ね」と恫喝をくりかえし、住民を壕から追い出し、赤ん坊までもスパイ呼ばわりして二十数万の命を奪ってきた。それは天皇制の象徴天皇制としての延命と、引きかえに「本土」と「本土」人民の安住が保

障された沖縄戦の本質であった。しかしそれは過去の事ではない。七二年五・一五「返還」攻撃過程の最後にして最大の攻撃たる海洋博は、「沖縄経済の起爆剤」と称して沖縄の全ては破壊し奪い尽くさんとし、大和人に忠誠を誓う沖縄人をつくり出さんとしている。しかしながら決死隊を最先頭にした今日の闘いでその狙いは見事にクサビを打ちこまれたといえよう。

流された血は血であがなわれなければならない。沖縄戦における同朋の血で染まる摩文仁が丘は沖縄人の手に奪いかえさなければならない。そうであるがゆえに今日の闘いは大成功をおさめたのだ。

沖縄の兄弟、姉妹達。

更に大胆に闘いを展開しょう。摩文仁が丘決戦の勝利を海洋博爆砕へ向け進撃しょう。闘うアジアの、朝鮮、中国人民との連帯、血債をかけた闘いとはまさしくこの闘いである。天皇制、天皇制イデオロギー攻撃に対する闘いとは糾弾を突破した闘いへ突き進む事は今鮮明となった。勝利の日まで必死で闘い抜け。共に奮闘せん。

皇太子沖縄上陸決死阻止、海洋博粉砕
大日本民族主義粉砕、沖縄解放
闘う沖縄青年は団結せよ！

一九七五年七月十七日

皇太子アキヒトよ！　沖縄人の熱い怒りの炎を身をもって思いしれ！

沖解同（準）本部白銀決死隊員　金　城　博　文

マブニ参拝、海洋博出席を企む皇太子アキヒト・戦犯天皇ヒロヒトに告ぐ。

わが沖解同（準）と沖縄人としての自覚を忘れぬ全ての沖縄人は皇太子アキヒトの沖縄上陸、マブニ参拝を断じて許しは

しない。

皇太子アキヒトよ、沖縄人虐殺の張本人たる天皇ヒロヒトよ。

今こそ沖縄人の四百年にわたる大和への怒りを思い知るがよい。

サツマ侵略以来、四百年になんとする大和による沖縄への差別的抑圧、植民地支配は、天皇の軍隊をもってする強権的な大和への併合たる琉球処分とそれに続く差別＝同化攻撃、徹底した皇民化教育によって、去る沖縄戦において「本土」防衛の捨て石として二〇余万の死者を出すという筆絶につくしがたい苦痛を沖縄人に強制した。

まさに沖縄人にとって、大和の支配、就中明治以降の天皇制下の支配と同化ー皇民化攻撃は「方言ぼく滅運動」に端的に示される様に、全く屈辱的なものとしてあった。その支配の結果は、「本土」防衛のタテとしての沖縄戦として沖縄人に破滅と死を強制したのである。

更に敗戦後に至っては、国体護持＝天皇制温存、「本土」復興の代償としての米帝への売りわたしと米軍政の下での人権をも無視した軍事支配下の生活を強制してきたのみならず、六五年日「韓」条約をもってする朝鮮植民地化攻撃と時を同じくする佐藤の訪沖に如実に示される如く、アジアへの侵略反革命へ向けた日帝の利害にもとづいて、沖縄人民を全く無視して軍事基地強化、ベトナム前線基地化を推進し、更なるアジアへの侵略反革命戦争体制へ沖縄を組みこまんと画策しはじめたのである。

戦後一貫して沖縄を体制的延命と戦後復興のとりひきに利用してきた日帝は、今また日米安保のアジア核安保としての強化の為、全く沖縄人の要求を無視し、圧殺した七二年「返還」＝復帰を強制し、「返還」攻撃の政治的・経済的・社会的総結着を海洋博による沖縄大改造＝総破壊として進行し、同時に戦犯天皇ヒロヒトの沖縄上陸をもって沖縄戦を清算して七二年「返還」＝復帰の承認をとりつけんとしており、その手はじめに皇太子アキヒトの沖縄上陸とマブニ参拝を何がなんでも強行しょうとしている。

だが、しかし、皇太子アキヒトよ、天皇ヒロヒトよ。

沖縄人の心の中に四百年にわたって蓄積されたヤマトへの怒りは、どのような手段をもってしても消し去ることは出きない。

にえたぎる怒りは皇太子上陸と海洋博の喧騒の中でますます燃えあがろうとしていることを胆に銘じておくがよい。

確かに復帰運動にかけた沖縄人の自己解放へと歪曲されていったにせよ、七二年「返還」＝復帰は沖縄の矛盾を深めこそすれ、解決しておらず、更に海洋博下の沖縄にあらゆる矛盾が集中されようとしている現在、沖縄人の忍耐にも限度があろうというものである。

沖縄上陸を強行せんとしている皇太子アキヒトよ。

どのような弾圧体制をもってしても、右翼を何千人動員しようとも沖縄人の闘う意思をくじくことはできないことを、沖縄人を一人残らずマッ殺せぬ限り、この沖縄の地には天皇・皇太子の安息の地は一寸もないことを思いしるがよい。

天皇ヒロヒトよ。自らの延命の為、沖縄人二〇余万を虐殺した沖縄戦の血債はいまだ清算されてはいないのだ。

「戦後三〇年間、ほったらかしておいて、今さら何をしにくるのだ」という沖縄戦を生きのびた老農夫の怒りの声をきけ。

沖縄戦の責任は皇太子の空戻やペテン的言辞で清算できるものではないのである。

天皇・皇太子のマブニ参拝こそ沖縄戦の清算をねらったものであり、我々沖縄人は断じて天皇・皇太子のマブニ参拝を許さず、あくまで闘うことを宣言する。

そしてまた、天皇の戦争責任をあいまいにし、「象徴」天皇制を温存し、そのことによって自らの戦争責任をあいまいにしてきた大和人の無責任・無自覚こそ、日帝の沖縄支配、朝鮮、中国アジアへの侵略を支えているのであり、その反省ぬきにのうのうと「同じ日本人だから」「復帰した日本の領土＝沖縄県」に海洋博観光客としてたちあらわれる大和人こそ日帝の尖兵ー抑圧者であり、我々沖縄人はこのような大和人を徹底的に糾弾する。

そもそも我々、沖縄人は日帝の差別支配を決して容認することはできないのであり、だからして新たな差別軍事支配をしか意味しない七二年「返還」＝復帰を認めることは断じてできない。

まさに七二年「返還」＝復帰とその総清算としてある海洋博こそは、沖縄の産業と自然、生活を総破壊し、人心を荒廃させている元兇であり、更に沖縄人を大和へとたたき出したうえ沖縄差別の下で安価にこき使うという現代のソテツ地獄の再編をねらったものであるからである。

二・四ゼネストの破壊を手はじめに近年、ますます日帝の尖兵として反動的に自らを純化している屋良。

海洋博ーCTSを三井、三菱という二大ヤマト資本の尖兵として推進し、その番頭として私腹を肥やしている宮里。

そして在ヤマト沖縄人同朋をふみ台にして大和人にとりいり、その手先として沖縄を大和に売りわたしてきた大浜。

これら沖縄人内の反動分子共が、沖縄人のほこりさえ失ない、同化主義者＝復帰主義者としてたちふるまい、右翼天皇主義者として自らの階級性を鮮明した現在、沖縄人の沖縄解放へ向けた正義の闘いは、これら右翼反動分子の存在もまた決して許すことができない。

同時に屋良ー宮里の忠実な支持者であり、屋良ヨーゴの為に常に沖縄人民の利益を日帝に売りわたし、闘いの圧殺者としてふるまってきた社会党ー共産党の皇太子上陸阻止闘争に対する対応を見よ！

沖縄解放闘争の革命的、暴力的発展とその対極に生み出された反革命ー右翼に恐怖したこれら日和見主義者共は陰然、公然たるサボタージュによって闘いの圧殺、解体に必死になっている。

今こそ我々は、皇太子上陸阻止闘争の圧殺の為に白色テロルを開始した右翼反革命とそれに恐怖してすくみあがり、公然と逃亡と敵対をはじめ日和見主義者共を沖縄解放闘争の場から断固として放逐してやらねばならない！

今や、反ヤマト、反海洋博、反天皇の戦闘は、わが沖解同（準）を先頭とする皇太子アキヒトに対する決死糾弾の闘いとして開始されたのである。

マブニケ丘糾弾闘争、故船本氏の焼身抗議自殺という闘いを伴いつつ、海洋博と天皇・皇太子上陸に対する闘いは革命と反革命、革命派と日和見主義、右翼反革命との激烈な闘いに発展しつつある。

海洋博粉砕、皇太子上陸阻止ー海洋博決戦に対する態度こそ革命と反革命、革命派と日和見主義を分かつ分水嶺となっている。

七二年「返還」＝復帰に対する沖縄人の怒りは三年目の五・一五闘争において市街戦として大爆発した。

沖縄人の闘いは、反海洋博、反ＣＴＳ、反基地闘争として、ますます拡大しており、皇太子アキヒトの強権的な沖縄上陸によって今沖縄人民の怒りはその頂点に達しようとしている。

天皇ヒロヒトよ、皇太子アキヒトよ！

沖縄人の熱い怒りの炎を、大和では忘れ去られた天皇糾弾の嵐を、身をもって思いしるがよい。

わが沖解同（準）は、わが故郷、わが祖父母の地たる沖縄を守り、大和人、天皇・皇太子のジュウリンを絶対阻止する闘いの最先頭にたつ。

海洋博に名をかりた沖縄占拠を許すな！

日本への同化を拒否し、中国、朝鮮、アジア人民と連帯せよ！

侵略の尖兵たることを拒否し、沖縄解放闘争に勝利せよ！

海洋博粉砕！皇太子上陸阻止ー海洋博決戦勝利！

すべての沖縄人は沖解同（準）に結集し、海洋博粉砕！沖縄解放闘争に決起せよ！

一九七五年七月一七日

ヤマト人の自己批判に踏まえ
天皇一族の戦争責任を糾弾し、沖縄上陸を阻止する

「本土」青年（戦旗派）白銀決死隊員　川野純治

皇太子アキヒトよ！我々は、お前ら天皇一族の差別抑圧の歴史を糾弾する。天皇ヒロヒトの戦争責任、とりわけ沖縄戦における二十数万人の沖縄人民虐殺、朝鮮人民虐殺の責任を断固として糾弾する。

一六〇九年サツマ侵略、特に一八七九年「琉球処分」以降、天皇制の下で沖縄と沖縄人民は、大和の差別抑圧支配に苦悩を強いられた。まさに、この差別抑圧支配の集中的表現こそ、沖縄戦であり、天皇の名による沖縄人二十数万人の虐殺であった。そして、戦後も沖縄と沖縄人は、天皇（一族）の戦争責任の隠ぺいと天皇制の延命のため、また敗戦帝国主義国日本の復興の為、米軍の軍事支配の下に売り渡されたのだ。

まさに、沖縄の歴史は天皇制の下での苛酷な差別、抑圧、収奪、同化の歴史であった。このことを強いたのは、天皇（一族）と日帝ブルジョワジーであり、それを支えたのが、他ならぬ大和排外主義に屈服した日本プロレタリア人民であったこと。このことを何よりもはっきりと痛苦にとらえ返さねばならない。

特に、「本土」プロレタリア人民と沖縄プロレタリア人民の関係をはっきりと浮きぼりにした。沖縄人民の「本土復帰」闘争の意義をはっきりと確認する必要がある。沖縄人民の「本土復帰」闘争は、日本帝国主義の一貫した沖縄人民に対する差別支配に対する怒りとしてあり、それからの脱却を求める沖縄人民の自己解放闘争であった。同時に、日米安保反革命同盟ー米軍政支配に対する「基地撤去」の斗いとして大爆発し、不断に「本土」人民との斗いの結合を追及したものであったといえる。

だが、「本土」人民は、二・四ゼネスト回避に端的に示される如く、沖縄人民の血の斗いを一切無視、切り捨ててきたのである。60年安保ー沖縄闘争において一定高揚したとはいえ、不断に沖縄人民の斗いに連帯しえず、ましてや、72年5・15以降、ほとんどの部分が沖縄解放闘争から召還していることを徹底して自己批判せねばならない。

我々は、このような帝国主義国抑圧プロレタリア人民としての血債にかけ、沖縄人民の斗いに徹底して連帯しきる必要がある。

その上にたって、我々は、天皇（一族）に対する戦争責任の追求、一貫して沖縄人民に差別と抑圧を強いた天皇（一族）に対する糾弾闘争を展開する。

皇太子アキヒトよ。お前は一体どんな面を下げて沖縄へ来るというのか。明治天皇以来つまりお前のひいじいさん以来、一貫して沖縄人民を差別し抑圧したことを忘れてはいまい。沖縄戦において、二十数万人の沖縄人民あるいは朝鮮人民を虐殺したのは、お前の父天皇ヒロヒトである。また、戦後沖縄人民を苛酷な米軍政支配に売り渡したことによってお前らは今日までのうのうと延命しつづけられたのだ。

知っているか。「復帰」後、「本土」独占企業が大量に進出し、農民から土地を奪い、漁民から海を奪い、全ての住民に生活破壊を与え、女性をサービス業へと追い込め、「買」春観光を強いられる沖縄人民の苦悩を。日本軍＝自衛隊の強行上陸とともに、日米共同演習、軍事基地は強化され、一方で全軍労の大量不当解雇攻撃を集中的に行なっていることを。お前が「名誉総裁」として先頭になっている海洋博こそ、七二年「返還」攻撃の最後にして最大の攻撃として、我々ははっきりと見ぬき反撃する。沖縄から沖縄人をたたき出し、沖縄を「基地とCTS・コンビナートと『買』春観光」の島へと大改造せんとするものこそ海洋博そのものなのだ。我々は、天皇制、天皇制イデオロギーをふりかざし、最先頭で沖縄へ上陸せんとするお前を絶対に許さないし、海洋博を絶対に粉砕する。

皇太子ー天皇一族の沖縄上陸は、日帝の一貫した沖縄差別支配とその集中環たる沖縄戦の責任を隠ぺい、清算せんとするものであり沖縄戦を「聖戦」化し、沖縄戦「戦没者」を英霊化せんとするものである。更に、海洋博攻撃の中で「沖縄的なもの」「海洋性・進取性」をあおりたて、釣魚台略奪を軸に、天皇制、天皇制イデオロギーを全面開化させながら、沖縄人を再び侵略反革命戦争へと動員せんとするものである。

だが、沖縄人民は、「復帰」後、植樹祭・若夏国体と、相次ぐ天皇の沖縄上陸策動を粉砕した。そして、海洋博・皇太子上陸攻撃を前にした今年の「5・15」は、〃沖縄処分糾弾〃として沖縄人民の怒りは大爆発した。まさに、今、三たび沖縄は天皇と天皇制に対する怒りの島として大爆発している。

「天皇、皇太子が今さら何をしにくる」「30年間何をしていたんだ」「日本軍（皇軍）から壕を追い出され、食料を奪わ

れた」と住民は怒りを爆発させている。スパイ容疑で虐殺したこと、朝鮮人民を軍夫、慰安婦として強制連行し、あげくの果てに生き埋めにしたこと、赤ん坊がうるさいと、カンパンやチリ紙、あるいは注射で虐殺したこと等々、沖縄人民は今なおこのことをはっきりと脳裡にたたきつけ、戦犯天皇（一族）に対する怒り、糾弾を脈々ともち続けているのだ。

六・一八、沖縄人による〃海洋博粉砕〃〃皇太子くるな〃〃戦犯天皇糾弾〃といった摩文仁ケ丘糾弾闘争は、沖縄人民の怒りをはっきりと示している。我々は、この糾弾闘争の意義をはっきりとふまえ、断固支持、連帯していかねばならない。

同時に、我々は、日本階級闘争の排外主義的腐敗が沖縄人民に孤立を強いた歴史を痛苦にふまえ、沖縄人民の戦犯天皇（一族）糾弾の斗い、軍事基地撤去、差別軍事支配打破の斗いに何としても連帯しきり、血債にかけて決起しなければならない。

ベトナム・カンボジア人民の歴史的勝利は日米両帝国主義を決定的に追いつめた。絶望的危機に頻した日本帝国主義者は、朴反共軍事独裁政権のテコ入れを通じ、朝鮮植民地化攻撃を強めている。そして、天皇一族の沖縄上陸、訪米をもって、沖縄の反革命的統合をなしきり、日米安保反革命同盟を軸とした侵略反革命戦争体制を一挙的になさんと策動している。

だが、ベトナム・カンボジア人民、朝鮮人民、沖縄人民の斗いに規定され、現下の階級情勢はますます帝国主義者を追いつめているのだ。だからこそ日帝は、日本プロレタリア人民の天皇制イデオロギー＝民族排外主義への屈服と侵略反革命戦争への動員をなさんが為、国内支配の暴力的・強権的支配＝ボナパ反革命へと推展せんとしているのである。同時に、「上からの内乱」攻撃を強化し、「過激派キャンペーン」をはりめぐらし、アパート・ローラー、全国指名手配、デッチ上げ弾圧という革命派壊滅攻撃に出ている。

我々は、ベトナム・カンボジア人民、朝鮮人民、沖縄人民の不屈の斗いをはっきりと受けとめ、日帝のボナパ反革命攻撃、侵略反革命と全面的に対決し、勝利しぬく。

今、我々には、海洋博粉砕、皇太子ー天皇（一族）沖縄上陸絶対阻止の斗いが決定的に問われている。まさにこの闘いこそ、革命的左翼の十余年の歴史と、「安保ー沖縄決戦」の革命的継承をかけた闘いであり、日本階級闘争の排外主義的歴史への自己批判をかけた闘いである。ブンド建設十八年余の苦闘を受け継ぎ、大和の四百年にわたる沖縄差別支配の痛苦な自己批判をふまえ、今、沖縄人民、沖縄解放同盟（準）と固く連帯し、断固として皇太子糾弾闘争に決起する。

海洋博攻撃を通じ、沖縄人民を再び侵略反革命戦争に狩りたてんとする皇太子アキヒトよ！今こそ、日本ー沖縄プロレタ

リア人民の共同の階級的制裁を受けよ！

アジア侵略を積極的に推進し、アジア人民を虐殺し、沖縄戦に於いては二十数万人の沖縄人、朝鮮人を虐殺した張本人＝天皇ヒロヒトよ！日米安保反革命同盟の絶望的延命をはからんとする今秋訪米もまた決して許しはしない。皇太子アキヒトの比ではないことを坦に命じておけ!!

沖縄解放ー安保粉砕ー日帝打倒・米帝放逐

一九七五、七、一七

沖解同と連帯して
沖縄人民に対する歴史的血債をかけ斗う

「本土」青年（戦旗派）姫百合決死隊員　小林　貢

皇太子アキヒト！

沖縄人民の糾弾の声を聞け！

沖縄解放を戦取せんとする全ての闘う仲間達の糾弾の声を聞け！

大和ー日帝より四百年に及ぶ「差別・抑圧同化」攻撃の歴史は、皇太子アキヒトー天皇一族が一度「ひめゆりの塔」に参拝したからといって清算出来るものではない。

薩摩ー島津藩の武力介入は、沖縄人民から武器を奪い、生活手段を奪い、あげくのはては重労働と人間として生きる権利すら奪い去る徹底した差別支配を行なった。

更に明治政府による〃琉球処分〃は、差別同化支配の徹底化としてあった。

皇太子アキヒトよ！

差別同化支配の意味が理解出来るか、

沖縄語撲滅を唱い、沖縄語を使用した生徒が教師になぐられていく沖縄人民の無念さを理解出来るか。

同化教育、皇民化教育とは、暴力にあぐらをかく大和人ー天皇によってなされたことは皇太子アキヒト貴様が最っともよ

く知っているはずだ。
こうして沖縄戦における沖縄人民十数万人の虐殺が準備されたのだ。
皇太子アキヒトよ！
日本軍が沖縄人民を虐殺したことを忘れたのか、米軍と同様に、いやそれ以上に残酷に沖縄人民を殺したのは日本軍なのだ。
このことが一切語られず歴史のクズ箱に捨て去られ「戦争だから」の一語で語ろうとする天皇一族、大和人は絶対に許されはしない。
皇太子アキヒトよ！
歴史的事実はこうなのだ。沖縄の子供達の食料を奪い、泣けば敵に発見されるからと言って殺し、しかも母親の見ている前で、両足を持ち壁に頭を打ちつけ殺ろしたこと。
集団自決を強要され部落のほとんどの人々が死んだこと。盾にされ「捨て石」とされ十数万人の人々が命を奪われたこと。この歴史的事実をたった一度沖縄に来ることで清算せんとする姑息な目論見は、既に沖縄人民には見抜かれているのだ。
そして大和人としての我々は、我々自身が抑圧者であり差別者であったことの自覚と自己批判を実践的な闘いをもって表現する。
皇太子アキヒトよ！
我々斗う大和人も歴史的に大きな誤りを犯したことを自覚し、沖縄人民に対する歴史的負債を血債にかけ皇太子アキヒトを糾弾する。
皇太子アキヒトよく聞け！
貴様の沖縄上陸とは、日本帝国主義による沖縄差別同化支配、沖縄戦の清算、責任の陰幣を計らんとするものである。
更に米帝の軍事支配を陰幣しつつ沖縄戦の聖戦化、沖縄戦「戦没者」の英霊化を計り、再びアジアへ向けた侵略反革命戦争への動員を目論んでいるのだ。
これらの攻撃が更に重層的になり、沖縄人民の斗いの圧殺を狙い沖縄基地の強化、日米安保反革命同盟をもって日米両帝国主義の前線基地＝不沈空母として沖縄を形成せんとし沖縄人民を天皇の名の下に侵略反革命戦争の尖兵としようとしてい

ることである。
我々は、この日本帝国主義の攻撃を粉砕すると同時に、皇太子アキヒトを糾弾する。
皇太子アキヒト！
沖縄人民の闘いは不屈であり着実に前進しているぞ！
七二年植樹祭、七三年若夏国体の時何が起きたのか忘れはしないだろう。
天皇ヒロヒトの沖縄上陸が完全に阻止されたのだ。沖縄人民の血の歴史は、沖縄人民の苦闘の歴史であり、沖縄人民は、斗いの中から歴史を作ってきたのだ。
皇太子アキヒトよ！
沖縄「返還」後三年を経〝基地と「買春」と石油コンビナート〟の島として大改造されんとしていること、そしてその基軸こそ海洋博と沖縄振興開発計画であることを知っているのか、今なお「買春」をしなければならない沖縄の女性達がいること、大量の失業者、沖縄の自然の破壊等が進行し、沖縄人民に対して一層の差別軍事支配を強化していることを一度たりとも考えたことがあるのか。
皇太子アキヒト！
くり返して述べる。
沖縄「返還」後三年を経て何が変わった。基地は増々強化され、日本帝国主義軍隊＝自衛隊は沖縄に派兵され日米共同軍事行動としてアジア侵略反革命を狙っている。
日本「本土」の独占資本が進出し沖縄人民を喰い物にし、自然を破壊し、生きる権利すら奪っているではないか、全軍労の大量首切り沖縄人民を沖縄からたたき出さんとする「沖縄振興開発計画」、石油コンビナート、「買春」しかし沖縄人民は屈服せず闘いに決起している。
どれ程の沖縄人民が「皇太子来沖に反対」しているかわかるか。
皇太子アキヒト！
沖縄人民は貴様を絶対に許しはしない。
なぜだか理解出来るか。

天皇・天皇一族こそ悪の根元であり、支配者、抑圧者であったからだ。
歴史的に天皇制絶対主義が形成過程から侵略を策し（その明確な証拠こそ「琉球処分」なのだ）日本帝国主義形成の重要な軸を担った天皇制であればこそ、最大の差別者、抑圧者で我々にとっては打倒の対象でしかないのだ。
我々は、大和人としての闘いを沖縄人民の沖縄解放闘争に連帯し皇太子上陸絶対阻止！
海洋博粉砕に決起する！
沖縄人民に対する歴史的負債を血債にかけ不眠不休で闘う沖縄人民と共に突き進む!!
海洋博粉砕!! 皇太子来沖阻止!!
一九七五年七月一七日

「皇太子沖縄上陸阻止・戦犯天皇糾弾斗争を支持する会」（仮称）への参加を訴える

沖縄解放同盟（準）本部
関東沖縄解放同盟（準）
関西沖縄人有志
九州沖縄人有志
沖縄婦人連絡会議
沖縄女性解放会議

全ての沖縄人のみなさん、「本土」（日本）人民のみなさん、天皇制（イデオロギー）に反対する全てのみなさん、とりわけ戦前第二次帝国主義侵略戦争の渦中で、天皇制テロルの集中的砲火を浴びた朝鮮人、中国人、台湾人、アイヌ、並びに被爆者、部落民、奄美人、「障害者」のみなさん！

七・一七白銀、姫百合の決死的実力糾弾斗争を頂点とする七・一六〜二〇の〝五日間の激闘〟をたたかい抜いた沖縄青年、沖縄女性より「皇太子沖縄上陸阻止・戦犯天皇糾弾斗争を支持する会」（仮称）への結集を訴えます。

I

わが沖縄は一六〇九年、朝鮮侵略を撃退され領土拡大の矛を南方に転じた薩摩―徳川幕府に朝鮮侵略に協力しなかったことを口実に武力侵略をうけ、以来、与論島以北の奄美諸島は薩摩領に直轄併合され、貨幣経済が途絶し物々交換経済に逆転したことに象徴される苛酷、暴虐な支配を蒙むり、他方、沖縄「本島」以南の沖縄・先島の島々は、オランダ、ポルトガル、スペイン等のヨーロッパ諸国のしのぎをけずる東アジアへの重商主義的侵略の世界史的環境の中で歴史的生命が朽ちた古代奴隷制国家＝琉球王国を、明・清の対日鎖国政策に対応した徳川幕藩政府の対明・清貿易機関としてカイライ化された上で

押しつけられ、ほしいままの抑圧と搾取をうけてきました。

そして、一八七九年、勤皇をスローガンとした明治維新の侵略的一環として、その担い手の一方を琉球王国侵略統治の元兇総元締たる薩摩藩が担い推進したことを実体的条件に、琉球処分は警官と軍隊で断行され、薩摩の冷酷極まる琉球支配は、天皇制を中軸に屹立した日本国家の内に、一層の暴虐な形態で継承・再編されてきました。琉球処分以降の沖縄と沖縄人の運命は、天皇と日の丸を押したてた朝鮮・中国・台湾・フイリピン、「南洋」諸島への天皇制日本国家の侵略と迫害の歴史の下に縛りあげられてきました。台湾・フイリピン、「南洋」諸島の日の丸を背負った日本人の植民者の大半が沖縄人で占められていた事実、「爆弾三勇士」決死隊十数名の過半数が奄美・沖縄人であった消しようもない事実、その様な沖縄人の天皇制に対する歴史的屈服と加担の一大帰結として、神州護持の沖縄戦という名の〝鉄の暴風雨〟が沖縄と沖縄人の魂と命を巻き上げながら吹き荒れたのです。

しかし、沖縄人全てが屈服したわけではありません。わが先達、沖縄「本」島名護出身の徳田球一大先輩は、蘇鉄地獄に苦吟する沖縄から上京し苦学力行する中で、沖縄と沖縄人の耐えがたい惨状、天皇制政府の迫害に対する天をも焦がす怒りと憎しみをバネとして、日本共産党創立の一翼を担い、天皇制打倒を斗う日本共産党の建設に奮迅し、あくまで天皇制テロルに屈せず沖縄魂で全身武装し獄中一八年をたたかいました。われわれは、琉球処分以降の天皇制日本国家の沖縄支配の中で、徳田球一大先輩が終生、天皇制に対して、沖縄人の名誉と魂を守るために命をかけて斗かったことを最大の誇りとします。徳田球一大先輩を生み出したわが沖縄の歴史と精神の不屈の戦斗性、人間性を誇りに思わずにはいられません。

II

沖縄戦は、富村順一氏が法廷を人民裁判の場として天皇糾弾裁判に転化し一点の曇もなく暴いた様に、ミッドウエイ海戦の敗北ーガダルカナル戦の敗北後、天皇制日本の敗北が不可避の事態となる中で、ソ連スターリン主義とアメリカ帝国主義の戦後処理＝世界分割支配の角逐を利用した無条件降伏の回避＝天皇制（国体）護持のそのためだけに戦略的目標を設定して斗われた戦争でした。国体を護持し天皇と天皇制を延命させるために沖縄を戦場とした日本軍は、戦略目的に忠実にたたかい、沖縄人はそれに協力し、共に米軍との死斗戦の中で沖縄の大地を屍で埋めていきました。

だがしかし、なおかつ、われわれは日本軍＝日本人の残虐行為を決して許すことはできない。満腔の憤りをもって弾劾する。嘉数高地の陥落後、壊走し敗残兵と化した日本軍＝日本人は「俺たちが沖縄を守ってやっているんだ」「それでも日本

人か、沖縄は沖縄人が守れ」と喚きちらして、壕から追いたて、食料、水を奪い、赤児を、そしてスパイ嫌疑で沖縄人を斬り殺していきました。われわれ沖縄人の歴史的屈服の当然の帰結、自業自得の結末であるとはいえ、なおかつ、われわれは日本軍＝日本人の残虐行為を決して許さない。沖縄人の流した血は、倍化した量で日本人に支払ってもらわねばならない。歴史は無慈悲に、そのことを証明するにちがいない。

沖縄戦ーそれは文字通りの琉球処分以降の天皇制日本の沖縄に対する差別支配・植民地支配の帰結であり総括です。帝国主義の時代とは侵略と戦争と革命の時代といわれますが、沖縄支配の総括が戦争としてなされたことをわたくしたちは、歴史的敗北として把える立場に立たねばなりません。天皇制日本の朝鮮支配の本質が、関東大震災に大虐殺としてその一端を表出した様に、沖縄戦においては、日本軍の日本兵の行為として日本人の沖縄と沖縄人に対する差別・抑圧関係は天皇を軸にして極めて具体的に噴出しました。沖縄戦を阻止し、それを革命に転化することに敗北した、いや、というよりそれ以前の段階の階級形成にあった沖縄人の屈服と敗北の総括を思想・理論面まで堀り下げて行なわねばなりません。天皇制に対する態度、戦争と革命に対する態度を抜きに語られ論じられる思想的営為や文化創造なるものが一切無力であることは言をまちません。沖縄戦にたちかえること、沖縄戦を出発点としなければなりません。

III

戦後沖縄社会は、沖縄戦とその帰結ー「捨石戦」として沖縄戦を貫徹することを通して、アメリカ帝国主義に国体を存続させることを強制し、また他方〝戦後革命の敗北〟を一方の与件として、天皇制を象徴制として温存し、それを軸に再編された〝平和憲法〟下の新生日本を前提に出発しました。

われわれは、戦後沖縄階級斗争の革命的伝統を断乎として継承しなければならないと考えています。沖縄階級斗争を祖国復帰運動としてのみ総括し、大日本民族主義への屈服としてなで切り、無として把握する立場からは絶望しか生み出しえないのは理の当然です。①沖縄解放斗争の権力問題を、日米軍事基地撤去の暴力的展開を中軸に解明する立場、②沖縄解放斗争の世界革命への直線性、直結性、沖縄人民の世界史的使命・任務の獲得にむけた「階級」形成の立場、③沖縄人民、とりわけ農漁民層の二年連続した千名の東京決起にみられる様な政治的活性化と流動化に踏まえ、農漁民層に脈打ち凝集されている反日、反軍の意識の全人民化、農漁民層の軍事的組織化にたつ立場、④コザ暴動という形で沖縄人民が創造した斗争形態、団結形態の継承と発展の立場にたちきって、沖縄階級斗争の革命的傾向の摂取と教訓化をなさねばなりません。

われわれは、五〇年代の人民党に領導された農漁民、基地労働者に依拠した戦斗的反基地斗争を現在的に把えかえし継承しなければならないと考えています。

日本共産党のコミンフォルム批判を契機とする主体性を喪失した党内斗争の泥沼化は、人民党に自立化を強い、その人民党は朝鮮戦争下の出撃基地沖縄で、日本人民との結合を掲げ、分離軍事支配を一層強化し恒久基地建設に奔走するアメリカ帝国主義に対して、農漁民層、建設労働者、基地労働者と大胆に結合し、屋良ら沖縄教職員会の基地問題から逃亡した安全地帯でたてられた「祖国復帰運動」の右翼日和見主義と対峙し、五〇年代の土地斗争、赤い那覇市政斗争等を斗ってきました。だがしかし、宮本顕治による日本共産党の党内斗争の終了と軌を一つにして、人民党は一九五九年五月の第十回大会を転機に右旋回し、教職員会との歴史的妥協から六〇年四月二八日の復帰協の結成まで至っており、われわれは復帰協結成以降の六〇年代沖縄階級斗争の右翼的歪曲が、すでに五七年岸がアイゼンハワーに対して「沖縄施政権の日本返還期日を十年後とする」と復活した日帝を代表して要求していることを見抜けず、日本帝国主義の安保同盟政策を水路にした、沖縄に対する分離＝軍事支配から直接軍事支配への転換に、沖縄人民を武装解除させた出発点があることを見なければならないと思います。

〝平和憲法への復帰〟なる運動は、とりもなおさず平和憲法の第一章、第一条が象徴天皇制である論理的帰結として、象徴天皇制ーその象徴としてのアキヒトとミチコの結婚ーの沖縄人民への浸透をもたらし、沖縄戦の歴史的体験に踏まえた戦前天皇制と天皇ヒロヒトへの徹底した憎悪と、象徴天皇制の受容とアキヒト、ミチコへの親愛という錯綜したイデオロギー状況を結果しています。

五〇年代「復帰」運動の革命的継承と六〇年代「復帰協」運動の革命的解体こそが今こそ問われています。七一年一一・一〇ゼネストまで登りつめ飽和点に達し、停滞と足踏みを余儀なくされた沖縄階級斗争の日米軍事基地撤去に向けた根底的な転換が問われているのです。

Ⅳ

「返還」攻撃の総決着として海洋博攻撃が賭けられており、七〇年代後期、八〇年代沖縄階級斗争の帰趨の一切合財がこの斗かいの如何にかかっているといっても過言ではありません。皇太子の沖縄上陸は、海洋博攻撃に付随した二義的なものではなく、ヤマト機動隊の沖縄支配が現出した一例をとっても、海洋博が返還攻撃の総決着としてアジアの不沈空母として

全沖縄社会を経済的・政治的・イデオロギー的に再編、改造するためにかけられてきた根本的・本質的攻撃なのです。

沖縄解放同盟（準）は海洋博決戦の前段階環として「皇太子沖縄上陸決死阻止」の方針のもと斗かいました。

では、その斗かいはいかに斗われ、いかなる地平を切り拓いたか!!

Ⅴ

去る七月一七日、戦犯天皇ヒロヒトの名代として海洋博名誉総裁の肩書で、ミチコとヤマト機動隊を伴なって沖縄上陸を敢行した皇太子アキヒトに対して、沖縄人民の沖縄戦の歴史的体験に踏まえた反天皇、反日本軍、反日本人の意思と怒りを体現して、戦斗的沖縄青年と「本土」（日本）青年が死を賭した糾弾斗争に決起しました。

第一弾の斗かいは、皇太子アキヒト・ミチコが沖縄人天皇主義者屋良の先導で沖縄「本」島南部戦跡に那覇飛行場から向かおうとして通過した糸満ロータリー近くで斗かわれました。数日前から白銀病院に擬装入院して、アキヒトとミチコの到着を満をじして待ちうけていたわが同志は、敢然とベッドを蹴って眼下のアキヒト・ミチコの車に狙いすまして火炎ビン、岩、鉄筋等を投げつけ、火炎ビンの炎上を見とどけるや息もつかせず階段をかけおり、ヌンチャクを手に突進していきました。自由民主党婦人部、生長の家、自衛隊関係者を動員して、日の丸の大波に酔いしれていたアキヒトよミチコよ！思い知れ！あれほど警告したにもかかわらず沖縄に足を踏み入れた以上、ただでは帰さない。生きては帰さない。

第二弾の斗かいは、姫百合の壕に入り、真暗闇で白骨の散乱する息をひそめた壕内生活を通して、沖縄戦における沖縄人の苦しみを想起し、腹の底からの魂の深部からの、沖縄戦を強要し延命した天皇と天皇制に対する怒りがこみあげてきたにちがいありません。白骨を抱いた暗黒の壕内生活は、戦後世代の彼らに、沖縄戦の地獄絵を物語り、天皇制と日本帝国主義への恨みをつぶやき、復讐を依頼したにちがいありません。わが仲間は、壕内生活を通して倍化した戦犯天皇と皇太子に対する報復と復讐の念に燃えて、一瞬の刻を待ったのです。

数秒のうちに壕をとび出し、ハシゴをかけ登り、皇太子アキヒト・ミチコの前面に躍り出、一発、二発、三発、四発と火炎ビンを投げつけ、爆竹を打ち鳴らしました。火炎ビンの直撃をうけ炎を浴びて腰を抜かし護衛官に抱きかかえられる皇太子アキヒト。「アレー」と一声叫んで逃げまどうミチコ。「戦犯天皇、皇太子沖縄上陸決死阻止！海洋博粉砕！沖縄解放！」声帯も破けよとばかり絶叫し、白骨を胸に縛り糾弾状をひそませて、ヌンチャクで血路をひらいて突進しました。皇宮警察

官との凄じい格斗、肉弾戦。銃を構える私服。壕入口に突き落される護衛官。

空前の歴史的斗かいはかく斗かわれたのです。沖解同（準）決死隊二名と「本土」（日本）青年の英雄的斗かいによって、沖縄戦を聖戦化し沖縄人死者の碑を死せる日本軍が都道府県別に集結、整列し占拠した摩文仁ケ丘に組み込み、摩文仁ケ丘を第二の「ヤスクニ」として沖縄ー「本土」（日本）人民を天皇制イデオロギーの下に、侵略に動員する攻撃を打ち破ったのです。

Ⅵ

糸満市喜屋武部落の老女は、南部情宣で訪ねた私たちに「姫百合の後、魂魄の塔に来た時、アキヒトとミチコは、顔は真青で膝が可哀想な程ふるえていた」と語っていました。又、南部ー北部の至る所で「何故、丸焼にしなかったんだ」の叱責をうけました。「アキヒトとミチコはマブヤーが必要だろうネー」という痛快な話もあります。アキヒトとミチコが姫百合で落したマブイ（魂）は火炎ビンで黒焦げになって、伊勢神宮の神官の力でも呼びもどせないにちがいありません。

連日の南部農漁民層との接触と沖縄戦の追体験を基盤に斗かわれた六・一八摩文仁ケ丘糾弾斗争、六・二三「日の丸」慰霊祭粉砕斗争、六・二五船本州治君の焼身決起と続く一連の六月の斗かいは、日本共産党の裏切りと敵対、亀甲ー峰原一派の県労協の機関私物化と逃亡、原水協の頓坐という、既成左翼の目をおおわんばかりの惨状の中で、七・一七姫百合・白銀を頂点とする七・一六〜二〇の〝五日間の激斗〟を準備したのでした。

ヤマト機動隊の準戒厳令状態下ともいえるむきだしの暴力支配の只中で、沖解同（準）の非公然ー公然両面にわたる断乎たる突出を中軸に、全電通青年会議の青年労働者が全軍労牧港支部青年部の青年労働者の参加も得て、本部ー九州地本ー県本部の「デモしたら全員組合権を剥奪する」という恫喝をはねかえして、七・一七ハーバービューホテル包囲攻撃斗争に決起したことは、とりわけ、沖縄労働運動の戦斗的存在と革命的前進の方向を指し示したものとして特筆されなければなりません。

七月の〝五日間の激斗〟は沖縄の全ての政治党派、政治サークルをふるいにかけ、既成労働、大衆運動の総破産を主体的内在的に突破して、沖縄階級斗争の根本的転換をかちとったといえるのではないでしょうか。

Ⅶ

ベトナムにおけるアメリカ帝国主義の敗退と民族解放斗争の前進は、帝国主義のアジア支配を根底から動揺せしめ、その

拡大された危機と矛盾は朝鮮半島に集中してきています。安保同盟の朝鮮危機に対応した強化と再編、安保同盟の要であり実体である沖縄基地の朝鮮侵略戦争を想定した戦略的再編と整備というアジア情勢の危機的深化は、沖縄社会においては、返還攻撃の総決着としての海洋博を通して、工業立「県」、観光立「県」の構想の下に、全面的な下部構造に至る社会再編が暴力的に強行され、階級構成の根本的改造が急激に進行しています。農漁民層から農地、漁場を買いとる形で進んでいる生産手段の強奪の過程は、沖縄階級社会からの農漁民層のヤマト、中南米への叩き出しであり、沖縄社会を、基地労働者、軍需産業＝CTSコンビナート労働者と観光産業に従事する都市小ブルの極めて基地への寄生性の強い人民と公務員、教員から構成される社会に大改造しようとするものです。農・漁業の破壊と観光立「県」、工業立「県」政策は、つまるところその本質は、基地に寄生した沖縄社会の尚一層の寄生性の強化、極限化にはかならず、そのことを通して沖縄基地の安定性と安全性を沖縄基地社会の安定性と安全性の中で恒久化させようとする攻撃をもつものといえます。

下部構造の激変はそれのみにとどまりません。

一九五七年、岸のアイクに対する沖縄返還要求、大統領行政命令の発布、五八年、ドル切換えを区切りとする日米帝の角逐と調整をはらんだ沖縄支配政策の転換の中で、成立したのが復帰協であり、原水協であり、県労協でした。海洋博に集約された返還攻撃は、文字通り、六〇年代に成立した政治的、階級的諸関係の、下部構造からする破壊であり、六〇年代を支えた諸条件の喪失であり、沖縄階級斗争はまさに正念場をむかえており、七・一七を頂点とする〝五日間の激斗〟は沖縄農漁民層の五〇年代的政治的登場の胎動を初めとして生み出しており、電通青年労働者の動向とあわせて、その主体的突破の方向を指し示したといえるのではないでしょうか。

Ⅷ

皇太子の「おもろ」の引用、沖縄人天皇主義者＝屋良のニライカナイの強調に見られる様に、日本帝国主義の沖縄と沖縄人に対する軍事差別支配、軍事的植民地支配のイデオロギー的中枢に、天皇制があり沖縄人の「海洋性」「亜熱帯性」「海洋的進出性・開放性」を煽動する方向で全面的に動員する攻撃があることを直視しなければなりません。天皇制をブルトーザーの地ならしのように沖縄と大和の機械的平準化、同化と考えることは危険です。天皇制（イデオロギー）の本質は侵略と差別のイデオロギーであり、侵略にむけた権力再編の中核にあることである以上、単なる平板な沖縄文化論では天皇は撃つことができず、逆に提灯もちに堕する危険すらあります。大城立裕や宮城営昌や外間守善の壮絶ともいえる天皇制への屈

服の現実から何かを学ばねばなりません。謝花昇の民権運動の継承から逃亡したことを学問的バネにして創始された沖縄学の伝統とは所詮こんなものかも知れません。島共同体の賞揚者である大城立裕の天皇制への屈服を胸に刻みつけておこうではありませんか。

Ⅸ

わたくしたちは、この「皇太子沖縄上陸阻止、戦犯天皇糾弾斗争を支持する会」（仮称）を天皇制と斗う人々、とりわけ天皇制による歴史的、現在的に迫害・抑圧されつづけてきた人々の結集軸になそうと考えると同時に、沖縄人民と大和人でしかない「本土」人民、大和人たることを止揚せんとしている「本土」人民との沖縄ー「本土」（日本）を貫ぬく反天皇を切り口とした階級的連帯の場として位置づけていきたいと考えています。

沖解同（準）は、その出発に当って部落解放運動を手本に朝鮮総連を導きに」と誓ってきましたが、沖縄人民とアジア人民、沖縄人と部落民の結合は、われわれがアジア人民に対して日本帝国臣民であり日本人でしかない過去と事実、そして部落民も大和人であること等の関係性を踏まえ、現象面としてある差別の共通性を民族性の面からも堀り下げながらも、共通の当面する具体的課題を共にすることを通じた、斗う中での連帯としてかちとっていかなければならないと考えています。わたしたちは、反天皇（制）こそ、その結び目でなければならないと考えます。

Ⅹ

みなさん！十一月三日（文化の日）海洋博日本ナショナルデーと一月一八日の海洋博閉幕式と皇太子アキヒトは二度、三度の沖縄上陸を敢行せんとしています。秋、冬に集中して観光客の仮面を被った大和人が沖縄に上陸し占拠し沖縄女性の性を喰いあらさんとしています。

皇太子を今度は一歩も沖縄へ入れない、大和人の沖縄占拠を許さない、海洋博粉砕の意志も固く本「……支持する会」への結集と参加を呼びかけます。

一九七五年八月一日

連絡先
沖縄　反権力反弾圧沖縄人民救援会（仮）
電話　〇九八八ー五四ー二〇八四
那覇市東郵便局私書箱二〇四六号
東京　横浜市鶴見郵便局私書箱六一号
関西、九州　未定